



TITLE:

日食遠征日誌(2): 南洋ローソップ島にて

AUTHOR(S):

柴田, 淑次

CITATION:

柴田, 淑次. 日食遠征日誌(2): 南洋ローソップ島にて. 天界 1934, 14(156): 227-232

ISSUE DATE:

1934-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165504>

RIGHT:

日食遠征日誌 (2)

南洋ロソツプ島にて、

柴田 淑次

○一月二十三日 火曜日 曇り 一時晴

愈々今夕目的地附近に着く事になつた。艦は北緯10度の線をぐんぐん南下しつゝある。テントを張つた後甲板では荷揚げの準備の爲め觀測隊の荷物で歩けない位、上甲板にある京大班の荷物も全部後甲板に移す。波は相變らず高い。午後六時頃吾々は豫定の目標ナマ島を発見す。艦のソーチライトを浴びせかけると、島の土人も松明を焚く。ナマ島の沖約5浬の點を南下する事二時間途に出迎への南洋支廳の汽船瑞鳳丸のマストの燈火を発見し、艦は午後八時十五分瑞鳳丸の横50米の點にてピタリと靜止した。瑞鳳丸よりは支廳の方々の訪問あり。我々は久し振りに船を見たので何時までも眺めてゐた。

午後十時突然京大班の一部は之れより直ちにレオール島に向ひ、夜を徹して觀測所を撰定せよとの事、森川理學士と小生は直ちに荷物をまとめ、毛布を一枚かゝへこんでボートで瑞鳳丸に向ふ。此處よりロソツプ島(レオール島はロソツプ島の東50米位の處にある)までは約4浬、リーフの中へ入らねばならない。八日間の春日にさよならをして、瑞鳳丸で一路ロソツプへ。

先發隊として我々の一行に加はつた人々は、東京天文臺の服部、竹田の諸氏、秋吉中佐、東日記者林氏等である。

月はシラスに霞んで海面は暗い。處が愈々リーフの處まで來た時、入口が見えず、船はどうしてもリーフの中へ入る事は出来ないと云ふ。再び春日に引返へすか如何に、色々議論も出たが結局リーフ外で瑞鳳丸は碇泊し、我々は瑞鳳丸に一夜を明かす事となつた。

○一月二十四日 水曜日 晴

瑞鳳丸は百噸ばかりの小さい船であるが、無線電信、ディーゼルエンジン、暖房冷房兩裝置を備へて最新式の船だ。併し船は小さいので昨夜は可なり揺れた。起床五時半、眼を醒ますと船は正にリーフに入らんとした。リー

フの入口は僅かに20米位しかない。昨夜暗夜に入れなかつたのも無理はない。リーフを越して約2浬、ロソツプ島の沖約200米の處で瑞鳳丸は停止した。直ちにモータボートに分乗して、ロソツプ島へ到る。海上より眺めたロソツプ島並びに附近の島々の景色、水は紺青色に澄んで、水深僅かに數米、波は全く無い、島の椰子の木、土人の小屋、砂濱等々、全く筆に盡しやうもなく美しい。午前六時ロソツプ島上陸第一歩、土人は一列に並んで、我々に最敬禮をしてゐる。森川氏と小生は直ちにボートでレオール島へ行く、色々物色したが結局レオール島の南海岸の或一個處に觀測地を撰定する。

後發隊の一行は春日艦より、平榮丸(貨物船)へ荷物を移し、更にリーフ内にてカッターに積み換へて午後四時第一船がロソツプ島に到着してより全部の荷物の勘定をしたのは午後十一時過ぎだつた。春日艦は午後十二時サチライトでしきりにサヨナラを信號しつつ、遙かに遙かに西方トラツク島へ向けて歸つて行つた。

土人は皆衣服を纏ひ、小屋も仲々立派である。今朝初めて椰子の實の汁を飲む、甘味が可なり強く渴を醫やすに絶好だ。我々は島の教會堂で寝る事になつた。觀測隊一行五十名が全部一棟の中で寝るので、可なり窮窟である。土人の言葉を少しづつ覚える。

○一月二十五日 木曜日 曇り一時晴 スコール

早朝より荷物をレオール島へ運ぶ。カッターに「うん」と乗せて、モータで引張るので仲々捗らない。

アインスタイン觀測のコンクリートの穴を掘る。休憩所と倉庫のテントを張る。

夜、月見に外へ出るとスコールに出會ひ、土人の家に逃げ込む。バット一本と貝殻數個とを交換して悦に入る。

○一月二十六日 金曜日 曇 スコール

土人と共にレオールへ行く途中、スコールに會ひ、シャツとズボンをビシヨ濡れにする。アインスタインの方は穴も愈々出来上つて、杭を打込んでゐる。砂地なれど砂細かく密なのでコンクリート工事に差支へない。小生の受持の部分としては、ブライマリ・ミラのアヂマスを決める。明日よりコン

クリートに掛る筈。

○一月二十七日 土曜日 曇雨

よく雨が降るので仕事が延びて氣遣はれる。早朝より島の大工を一人雇ひ、コンクリートの枠を作らせ、土民に穴を掘らす。レオルとロソツプ間の海流はトテも速い。潮の干満1米位あり。コンクリート用の砂石等を運び、夕方にやつと基礎工事を終る。

米人のコロン氏とジョンソン氏の観測所は同じくレオル島にて我が観測班の東方50米の地點、上海自然科學のマグネの観測所は其處より更に東方100米位の地點。又、東京天文臺、東京帝大、海軍水路部、電波班の観測地はロソツプ島にて教會堂の北方100米の地點に集まつてゐる。

○一月二十八日 日曜日 快晴

一日中快晴、南洋の空の色は又格別。今日は日曜日で島民(土人の事を我々はかく云ふ)が休むので島の大工(日本人、トラックより來てゐる)を一人雇ひ昨日のコンクリートの續き。夕方までに全てを終る。とても暑い、アインスタインの方のコンクリートの基礎工事の方を手傳ふ。

午前中島民と我々の顔合せあり、秋吉中佐、早乙女博士、上田博士の挨拶の後ロソツプ、ピース、ナマ諸島の酋長(現在では村長と呼んでゐる)の挨拶あり、盛會であつた。村長は皆老人にして別に變つた處なし。島民は我々に會ふ毎に「今日は」日本語で挨拶をしてくれる。子供までも氣持が良い。

今日は一日中雨が降らなかつたので、風呂がないと云ふ。夕涼みに海岸の船の中で寢轉ぶ。十二日月が碧空にかゝつて椰子の葉蔭を漏る其の光り、全く夢の國に來た如し。

カノープスが内地のシリウスよりも高く感じる。ボラリスが低くて見難い。オリオンが天頂にかゝつてゐる。「南へ來たな」と感じた。

○一月二十九日 月曜日 晴後曇雨

昨日コンクリート作業をやつて身體が痛い。今日は倉庫用テントの中にて荷物を解き、組立てにかゝる。雨が屢々降る。夕方までに大體整理を終る。アインスタインの方はコンクリートの一部の基礎工事を終つた。

南洋に珍しい雨ばかりの日が続く、梅雨のやう。正午の気温 25°C.

○一月三十日 火曜日 快晴

久しぶりの快晴に恵まれて仕事が捗つた。アインスタインの方はコンクリートの枠を建てた。フラツシュ(小生分擔)の方はコンクリートの上へ第二面鏡を乗せ、寫眞装置の臺を造る。機械のカバーの爲めテントを張る。

ロソツプ、レオール間の景色非常によし。晴れると暑い。

○一月三十一日 水曜日 曇一時晴 夜雨

午前二時月食あり、部分食なり。肉眼觀測をする。夜半初めて南十字を見た。想像の通り餘り大したものでもない。

晴れてゐる内と思ひ、平井君に手傳つてもらつて シロスタットのセッティング。第二面鏡のセットには閉口した。重くて島民を六七人使つた。夕方までにすつかり終る。アインスタインの方はコンクリートを全部流し込み、工事を終つた。コーン氏の處へ冷やかに出掛ける。コロナのボラリゼーションを寫眞に撮るらしい。大體、出來上つてゐた。

夜又雨降る。

○二月一日 木曜日 曇り一時晴 雨

午前中雨。全くよく雨が降る。アインスタインの方も、コンクリートの乾くまで休み、フラツシュの方も天氣回復まで休み、一日中休養をとる。

内地を出て半月、馴れない仕事と食料、飲料水の爲め、終に胃腸を壊はし、夜になつて胃が益々痛くなつた。

○二月二日 金曜日 快晴

昨夜中胃の痛みの爲め眠れず、全身に發疹する。便所へ十數回通つた。午前幸ひトラックより醫者が來てゐたので診察を請ふ。折角の快晴も、一日中床の中。夜お粥を一杯食つたきり。

京都の皆さんは午後二時よりピース島(ロソツプ島の南西方)へ遊びに行つた。經緯度、時刻の觀測の爲め千田上谷兩君は夜レオール島へ。

○二月三日 土曜日 快晴

六時半に相變らず眼が醒める。歩くと腹が痛い、頑張つてレオールへ行き、器械のセッティング、艦の中でのシロスタットの計算のセッティング

のチェックなどする。

観測は鏡の位置の関係上午後一時以後は出来ない。一日中お粥を食ふ。今日の温度は 31°C のこと。スコールが来ず、風呂なし。

○二月四日 日曜日 晴

日曜に拘らず早朝よりレオール島へ行く。平井君に手傳つてもらつて、寫眞装置のセッティングの大體の見當をつける。日曜日なので午後は休みにし、レオール島の寫眞を三枚ばかり撮る。午後三時頃東京天文臺の人々が見學に来る。濾過器を使用して寫眞の現像液を作る。磁氣班はアランワツセル島へ行つた。

今夜も風呂はない。身體もまだ回復せず、一日中お粥を食ふ。

○二月五日 月曜日 晴

カメラのセットに一日中かゝる。尤も午後一時以後は太陽は使へないけれど、アインスタインの方は今日一日で赤道儀の極軸及び望遠鏡の筒を全部コンクリートの上への釣り上げ作業は終つた。之れからは細部の取付けである。

お粥腹ではとても疲れて駄目！ 夜になつて早速寝てしまつた。

○二月六日 火曜日 晴

天氣が続いて仕合せだ。眼視分光儀の据付け場處を撰定する。分光寫眞機の据付けをやつと終り、午後一時すぎ太陽の使へるギリギリの處で寫眞一枚撮る。然し雲の爲め惜しくも妨害された。水温 27.5°C 斷然水の使用を必要とする。アインスタインの方は時計仕掛の据付けにかゝつてゐた。

午後島の娘達が大勢沖の方で魚を取つてゐた。濱からバチリと一枚撮つておく。夕食に初めて恐る恐る飯を食ふ。

○二月七日 水曜日 晴後曇 スコール

今日は七時頃レオール島へ出掛けた。昨日のセッティングを少しく修正し、寫眞を撮る。焦點決定の爲めの寫眞である。現像液も氷を使つて、 20°C まで冷却したが、乾板がカブる。取枠を覆ふ黒布等を取揃への爲め一日中を費す。アインスタインの方は時計仕掛けや赤緯のクランプの取付けを終り、愈々觀測の第一コースに入る。日食まで僅かに一週間。

観測テントの傍らの濱で海蛇をみた。白に茶色の縞のある美しい蛇だ、星座の動物である爲め懐しい氣がした。

〇二月八日 木曜日 晴後曇雨

朝七時 レオールへ、ロソツプ、レオール間の海流速く、傳馬船を流されて島民に救けてもらつた。

太陽のスペクトル寫眞を一枚撮る。焦點は大體定つたらしい。之れ以上觸らない方が良からう。寫眞を一枚撮つた時分より曇り出し、終に雨になり、一日中雨降り、午後はコンバリズン・スペクトルにアーク燈を用ふる事に決定し、その組立て試験に費やす。

寫眞乾板は細心の注意の後漸くカブらなくなつた、内地と變りはない。

〇二月九日 金曜日 曇一時晴

外人、磁氣班の連中とレオールへ、コンバリズン・スペクトルの試験、カールボンはラインが妙いので鐵を用ふる事にした。夕方一先づ完了。アインスタインの方はガイディング・テレスコープの取付中である。ジョンソン氏(仕事はコロナのポラリゼーション)は最早準備は完了した由。他の一人コーン氏(仕事は同じくコロナのポラリゼーション)も大體終つたらしい。

内地との通信は船の都合上明朝までに手紙を出せと云ふので、夜はテールを圍んで皆んなで手紙を書く。(續く)

天文界の人事消息

佛國リヨンの天文臺長であつた M. Mascart 氏がパリに移つたので、其の後任に首席 M. Jean Dufay 氏が臺長に就任した。

米國ケンブリヂ市で有名な天文光器製作者 A. Clark 會社の後繼者として働いてゐた C. A. Robert Lundin 氏は近頃クリヱランド市の Warner-Swasey 會社に入り、新しい McDonald 天文臺のために200種の大反射鏡を作ることゝなつた。

米國の隕星學者でシカゴの Field Museum の館員である Oliver Cummings Farrington 博士は去る十一月二日に死去した。

去る1933年十一月20日、佛國ニス天文臺長 Faye 氏が來朝、神戸に上陸し、直ちに汽車で東京へ赴いた。